様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０９０４

研究課題名（和文）風景構成法の作用機序に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research of mechanism of Landscape montage technique

研究代表者
佐々木　玲仁（SASAKI, Reiji）

九州大学・人間・環境学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：７０４１１１２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，心理臨床場面で用いられる描画法の一つである風景構成法について，描画場面を設定し，映像や音声などの様々なデータを収集，分析した。臨床心理学研究者と認知科学研究者の協働により，見守り手の主観的な評価と，描き手の各アイテム描画終了時の動作の間に対応があることが示された。このことから，臨床実践現場における描画法についての有効な着眼点が得られたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The landscape montage technique is one of drawing technique used in psychotherapy. In this study, video-recorded data of the scene conducting landscape montage technique were analyzed through the collaboration with clinical psychologist and cognitive scientists. The results indicated the correspondence between therapist's subjective evaluation and drawer's action. The correspondence showed practically effective point of view of drawing technique.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：風景構成法　心理療法　描画法　行動　話者交替　クライエント-セラピスト関係

１．研究開始当初の背景
（１）描画法の一つである風景構成法は，心理臨床の実践の場において，心理アセスメント技法（描き手のパーソナリティや心理的上体を把握する方法）として用いられるが，それだけでなく，治療技法（描き手自身に状況理解を深めさせて，心理的安定をもたらす方法）として用いられることも多い臨床的有用性の高い技法である。

（２）風景構成法には固定的な解釈技法や数値化の方法は存在しないが，そのためにむしろ描き手や描画状況によって様々な視点から柔軟に情報を得ることができ，またそれをセラピストとクライエントの相互作用の中で用いることで治療的意義も多い技法になっている。

（３）一方で，固定的な解釈法や数値化の技法を持たず，職人的な使い方をされているために，技術の伝達の困難性と，多職種や他分野の研究者への説明の困難性を内在的に抱えている。これは，箱庭療法など，イメージを用いる非言語的な方法と同様である。これは，方法そのものが非言語的側面を多く含んでいるために，言語化することには本質的な困難性が含まれている。

（４）風景構成法は中井久夫によって 1969 年に考案されて以来，様々な研究が行われてきた。この研究の流れは 2000 年代前半には一旦停滞を見せたが，近年になって再び活発に研究が行われるようになってきている。しかし，その研究方法は，施行手順に則って描かれた絵の描き終ったものや，描画後のインタビューを扱っているものがほとんどで，風景構成法の最も重要な特徴だと考えられる描画プロセスについて研究として直接取り扱ったものはごく少ない。

（５）プロセスが最重要であるにも関わらずあまり扱われていない理由の一つは，それを扱うための技術的困難があることだと考えられる。しかし，このプロセスという点を外しては風景構成法の特徴を含めて研究を行ったことにはならないため，方法論的な洗練を進める必要がある。また，この洗練は，臨床実践と乖離したものになってしまっては意味がないため，その実践性を確保しつつ研究を行うことが必要になってくる。

２．研究の目的
（１）心理療法に用いられる描画法の一つである風景構成法について，その施行プロセスを実証性と実践性の両面を確保した上で研究を行い，心理臨床の職人技としての側面と，実証可能な対人相互作用としての側面の両方を検討することで方法論を洗練させていきつつ，描画が描かれていくダイナミックなプロセスを分析することで，この技法の作用機序についての知見を得ることを目的とする。
（２）本研究によって得られた風景構成法の作用機序についての知見は，他の心理臨床現場の非言語的側面についての新たな手がかりとして用いることができると考えられる。また，他の非言語的技法の研究を行うときに用いることができる方法論を開発することも一つの目的としている。

３．研究の方法
（１）調査場面として設定した風景構成法施行場面について，描き終った描画自体だけでなく，描画場面の映像データ，施行場面のトランスクリプト，試行終了後のインタビューのトランスクリプトをデータとして取り扱う。見守り手は，参加者募集に応じた大学生，大学院生 20 名（男性 2 名，女性 18 名，平均年齢 20.1 才，SD 2.1 才）である。

（２）映像データは，描画のプロセスを捉えられるように真上から撮影した真上カメラ，描き手と見守り手の全体を捉えられるようにフレーミングした真横カメラ，描き手を中心にフレーミングした描き手カメラ，見守り手を中心にフレーミングした見守り手カメラの４台を用いる。それぞれの分析では各映像を必要に応じて適宜用いた。

（３）描画場面では，臨床心理学研究者・心理療法家である研究代表者が見守り手として参与している。この見守り手の描画場面に対する主観的評価を指標として扱う。この主観的評価については，一つ目は，描き手と見守り手の間に心理的なつながり，関係性が生じてるか否かを主観的に評価したものである。
二つ目は，描き手の中で何らかのイメージが賦活している，つまり，描き手の中で心的なイメージが生き生きと動いているかどうかについて見守り手が主観的評価しているものである。

（４）描画場面での描き手の身体的動作についても指標化を行っている。描き手カメラの映像を用いて，描き手がアイテムを描き終わってから見守り手が次のアイテムを言うまでの間の描き手の動作（「上体を起こす」「手を両膝の上に置く」など,）を 6 名の評定者がコーディングした。

（５）描き手を，（３）の見守り手による主観的評価で群分けし，群ごとの身体動作の様相を分析した。身体動作については，各描き手内での各行動の生起しやすさを示す選択情報量の推移で表した。選択情報量は，その描き手の中でめったに起こらない行動が起きれば高くなり，よく起こる行動が起きれば低くなる。この指標が描画プロセスの進行とともにどのように変化するかを検討の対象

とする。

（6）描画場面の映像について，見守り手である研究代表者と研究分担者，他分野の研究者を含めて検討を行った。ここでは，映像を適宜提示しながら，その場面で起こっていることを見守り手が言語化し，それを元にディスカッションを行った。

（7）描画場面の映像について，21 年の経験ある心理臨床家に視聴してもらい，施行の状況や，描画場面について検討を行った。

４．研究成果

（1）主な研究成果は雑誌論文①に掲載している。見守り手の主観的評価で，描き手と見守り手の関係性が成立し，描き手の中でのイメージの賦活が生き生きと感じられたとされた群は，一つ目の「川」アイテムでは高かった描き手の身体動作の特異性が，二つ目の「山」で一旦下がり，再び上がった後描画プロセスの進行に従って徐々に下がっていく，即ち，描画の進行とともに描き手がアイテムを描き終わった後の動作が一定していくという傾向がみられた。一方で，関係性があまり成立せず，イメージもあまり賦活しなかったと感じられた群では，このような傾向が見られず，描画プロセスに関わらず，動作の特異性の上下が見られた。

また，描き手の中でのイメージは賦活していたと感じられるものの，描き手と見守り手の関係性はあまり成立しなかったとされた群では，アイテム描画後の動作がプロセスの進行と関係なく一貫している，すなわち動作がほぼ一定であるという傾向が見られた。

このように，関係性が成立して描き手の中でのイメージの賦活が起こり，風景構成法が臨床的に充分機能していると考えられる描き手の場合，プロセスを追うごとに描き手は身体動作の定型化というかたちで描画完了の合図を見守り手に送っているという可能性が示された。

（2）（1）により，風景構成法の見守り手として描画場面に関与している心理臨床家が主観的に抱いている関係性の成立やイメージの賦活という評価が，描き手のアイテム描画後の身体動作と対応していることが示された。 このことは，臨床実践の場で風景構成法を用いる際に有効な視点となることが考えられる。また，心理臨床家の教育の過程において，アイテムの描画終了時の身体動作に着目することが有効である可能性が示唆された。

（3）上記の成果は，一人の見守り手が見守りを行った結果を分析したものである。このデータについては経験のある臨床家によるコメントを得，また，心理臨床家とそれ以外の専門家の間でのディスカッションの場で，臨床家同士の間では前提であるために言語化されない内容についても踏み込んで検討を行っている。これは現在も分析中であるが，この内容から更に新たな知見が得られることが期待できる。

（4）風景構成法におけるイメージの自律性について，関係性の成立およびイメージの賦活が起ったと評価された群の方が，そうでない群よりも生じる傾向が見られた。

（5）風景構成法の一つの段階である付加段階において，見守り手の見守り方の影響をうけることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①長岡千賀，佐々木玲仁，小森政嗣，金文子，石丸綾子,行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討 ： 描画法施行場面を題材として,対人社会心理学研究，査読有り，13,31-40,2013
http://syasin.hus.osaka-u.ac.jp/jjisp/013/naga.html

②長岡千賀 ，佐々木玲仁 ，小森政嗣，金文子 ，石丸綾子，心理臨床実践における描画に関する予備的検討(2) ： 描き手の動作を指標として，電子情報通信学会技術研究報告. HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎，査読無し 13(3)，11-16，2011

③長岡千賀 ，佐々木玲仁 ，小森政嗣，金文子 ，石丸綾子，心理臨床実践における描画に関する予備的検討，電子情報通信学会技術研究報告，査読無し 111(59)，143-148，2011

〔学会発表〕（計 7 件）

①佐々木 玲仁，金文子，大場麗，吉谷遼子，表現療法における見守り手の体験－風景構成法場面における見守り手体験の探索的検討 － ,日本箱庭療法学会第 27 回大会,2013.10.27.大阪府立大学

②佐々木 玲仁，石丸綾子，金文子，大場麗，吉谷遼子,風景構成法の付加段階に関する仮説の再現性の検討,日本心理臨床学会第 32 回大会,2013.08.27.パシフィコ横浜

③佐々木玲仁，長岡千賀，小森政嗣，金文子，石丸綾子,心理臨床実践における描画に関する実証的研究(2),日本心理学会第 75 回大会,2011.09.17.日本大学

④長岡千賀，佐々木玲仁，小森政嗣,心理臨床実践における描画に関する実証的研究(1),日本心理学会第 75 回大会,2011.09.17.日本大学

⑤佐々木玲仁，金文子，石丸綾子,風景構成法の描画過程に生じるイメージの自律性,日本心理臨床学会第 30 回大会，2011.9.2，福

岡国際会議場
⑥長岡 千賀，佐々木 玲仁，小森 政嗣,心理臨床実践における描画に関する予備的検討（2） ～ 描き手の動作を指標として ～,ヒューマンコミュニケーション基礎研究会,2011.08.26.京都大学
⑦長岡 千賀，佐々木 玲仁，小森 政嗣,心理臨床実践における描画に関する予備的検討（ヒューマン情報処理),ヒューマンコミュニケーション基礎研究会,2011.05.24.

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　玲仁（SASAKI, Reiji）
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号：70411121

(2)研究分担者
小森　政嗣（KOMORI, Masashi）
大阪電気通信大学・情報通信工学部・教授
研究者番号：60352019

長岡　千賀（NAGAOKA, Chika）
追手門学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：00609779